



変電所敷地内で発見された弥生時代
前期の柱穴や土壇

中垣内遺跡

(その五)

昭和六十二年以降、現在に至るまで、幸運にも、関西電力東大阪変電所敷地内で発掘調査をする機会に恵まれ、これまでに、三カ所の調査を実施し現在も一カ所を調査中です。敷地内の北東にあたる調査済みの二

カ所で、弥生時代前期の遺構が見つかっています。

地表から、わずか五十センチほど掘り下げる

もむしろ、土器の量の方が多といった感じでした。調査の結果、弥生時代前期の溝、柱穴、土壇などが見つかり、弥生土器のほかにも、石器、木製の鋏、鋤などが出土しました。昭和三十四年の調査で発見された、集落の続きの部分を調査したことになりますが、集落の範囲がさらに広がることもわかりました。

ここ数年、中垣内遺跡では、貴重な発掘や発見が相次いでありましたが、まだまだ、わからないことがたくさんあります。それは、大切な食糧である米を作った水田の跡が見つかっていないことや、集落で人々が生活していたはずであるのに、その墓が見つかっていないことなどです。

今後、調査の機会が増えれば、きっと見つかることでしょう。



ふもとから見た国見高地性遺跡

国見高地性遺跡

中垣内や寺川などから、龍岡方面の山々に目を向けると、阪奈道路が走り山の腹に昇竜橋という橋がかかっているのが見えます。その背後に小高い山があるのが目につきます。

標高は、一番高い所で二百十二メートルで、眼下に

大阪平野はもろろんのことと遠くは六甲山や北摂の山並みを一望することができます。まさに国見という名にふさわしい場所です。ここで、弥生時代中期と後期の土器片が採集されています。

このような高所にある

遺跡は、高地性遺跡、あるいは高地性集落など呼ばれています。

一般に弥生時代の遺跡(集落)は、稲作に適した低湿地に立地していることが多いのですが、弥生時代の中期から後期ごろになると、急に山の上にも遺跡が立地するようになります。このような、高地性遺跡は近畿から瀬戸内海沿岸にも見られます。

中国の書物『魏志倭人伝』や『後漢書』には当時、倭(日本)の国々の間で、戦争があったことが記されており、見張りをしたり、のろしの煙をあげたりするのに適した場所であるために高地性遺跡が出現したと考えられています。

国見高地性遺跡も、このような軍事的機能を備えた遺跡であったのでしょう。